哲学者井上忠の生涯：若手研究者時代

伊　佐　敷　　隆　弘

はじめに

本稿の目的は，哲学者井上忠（いのうえただし）（1926 ～ 2014 年，東京大学名誉教授）がどのような生涯をたどったのかを明らかにすることである．井上忠の哲学自体については，伊佐敷隆弘「根拠と経験――井上忠の哲学を『ギリシア哲学解釈』という枠からはずす[1)]」で既に論じた．また，誕生から最初の論文執筆（27 歳）までの時期については，伊佐敷隆弘「哲学者井上忠の生涯：誕生から最初の論文の完成まで[2)]」で扱った．ここでは，それ以降，アメリカ留学に出発する直前（41 歳）までの時期を扱う．

目　次

Ⅰ　研究者としてのスタート
　1　教師生活の始まり
　2　加藤信朗の哲学への復帰
　3　牛山章子との結婚
　4　初めての全国学会研究発表
Ⅱ　哲学とは何か
　1　井上忠の哲学観
　2　松永雄二との出会い
　3　藤澤令夫の哲学観
Ⅲ　「イデアイ」への道
　1　若手研究者として
　2　信州との関わり
　3　「根拠」「全体」「作品」

1)　哲学会編『根拠・言語・存在』（哲学雑誌，第 131 巻，第 803 号）有斐閣，2016 年，pp.76-97.
2)　日本大学経済学部編『研究紀要』第 83 号，2017 年，pp.19-42.

Ⅰ　研究者としてのスタート

1　教師生活の始まり

井上の大学教師としての生活は27歳のときに始まった．1953年（昭和28年）4月にお茶の水女子大学文教育学部で非常勤講師としてギリシア語を教え始めたのが教師生活の始まりである．文教育学部は文学部と教育学部の両方の機能を持ち，当時，哲学科，史学科，地理学科，文学科，教育学科の5つの学科が設置されていた[3]．井上が担当したギリシア語は文学科英文学英語学専攻の専門科目のひとつである．英文学英語学専攻では，「英語を深く理解するにはラテン語やギリシア語の知識が必要だ」という考えにもとづき，2年生のときにラテン語を，3年生のときにギリシア語を履修することになっていた．

このとき井上が教えた学生の中に，のちに井上の妻になる牛山章子[4]がいた．章子は4年生だった．2年生のときにラテン語を哲学科の藤田健治[5]から，3年生のときにギリシア語を非常勤講師の今道友信[6]から習っていた．今道は井上より4歳年上だが，旧制第一高等学校で井上と同学年である．章子によると，今道の教え方は丁寧で優しかった．今道が学生たちに向かって「うちに本があるから借りに来なさい」と言うので，東京都港区芝二本榎西町（現在の港区白金台2丁目）[7]にある今道の自宅まで4，5人の学生と連れ立ってしばしば訪ねて行った．今道がいないときは母親が学生たちを迎えてくれた．今道の父親は銀行の重役で，自宅はイギリス風の大きな洋館だった．今道の自室である広い洋間は，四方の壁がすべて本棚だった．

章子は今道の授業でギリシア語の単位は取得したが，ギリシア語の美しさに惹かれ，4年生のときもギリシア語の授業を受けることにした．そして，1953年（昭和28年）4月最初の授業に出た．そこに現れたのが井上忠である．大学からは「今道先生はご病気のため，代わりに井上先生がギリシア語を担当されます」と言われた．今道は直前の3月に大学院を修了し[8]，やがて，この年の夏，宮城県仙台市にあるドミニコ会修道院に入る．この時期の今道は大学院修了後の進路を模索していた．そのことが，ギリシア語の非常勤講師を辞めた一番の理由であろう[9]．ともかく，この1953年（昭和28年）4月から井上の教師生活が始まった．

章子にとって井上の第一印象は「こわい先生」だった．授業のテキストは田中美知太郎・松平千秋著

---

3)　お茶の水女子大学編『お茶の水女子大学一覧（昭和二十七年度）』1953年3月．

4)　井上章子（1932年～，共立女子大学名誉教授，英語学・英米文学）．本項「教師生活の始まり」は主に井上章子談による．

5)　藤田健治（1904～1993年，お茶の水女子大学名誉教授，ドイツ哲学）．

6)　今道友信（1922～2012年，東京大学名誉教授，美学）．

7)　住所は今道友信『知の光を求めて』中央公論新社，2000年，p.74などにもとづく．

8)　今道友信と井上忠は二人とも1945年（昭和20年）3月に一高を卒業したが，井上が法学部に進学したのに対し，今道はそのまま文学部哲学科に進んだので，井上よりも3年早く大学院を修了した．

9)　今道友信『知の光を求めて』pp.75-80にこの時期の迷いと修道会入りの決意が語られている．

『ギリシア語入門』（岩波全書）だったが，井上は，開口一番「もう皆さん第1課は予習してきたでしょうから，僕は本に載っていない例外を教えます」と言い，黒板にすらすら説明を書き出していった．章子はびっくりした．大学教師としての初めての授業に臨む27歳の井上の気負いが感じられるエピソードである．

井上は，この年の12月8日に論文「アリストテレスの『有』把握――第一の実有をめぐって」を完成させている[10]．これは1950年（昭和25年）12月に出隆（いでたかし）教授[11]に提出した学部の卒業論文「アリストテレス形而上学研究」を3年かけて書き直したものである．この論文は，翌1954年（昭和29年）3月に哲学会編『哲学雑誌』[12]に掲載された．哲学会は東京大学文学部哲学科出身の研究者による学会であり，『哲学雑誌』はその機関誌である．井上の書いた論文が活字になったのは，これが初めてだった．

このころ，井上は『哲学雑誌』の編集委員を務めていた．今道と加藤信朗（かとうしんろう）[13]も『哲学雑誌』に掲載する原稿を書いたが，加藤は今道と同じころ仙台市のドミニコ会修道院に入ったので，編集委員の井上は，修道院にいる二人と校正の打ち合わせをするために，夜行列車に乗って仙台まで行った[14]．その後，加藤と今道の論文[15]は，井上の論文と一緒に，同じ号の『哲学雑誌』に掲載された．

2　加藤信朗の哲学への復帰

1954年（昭和29年）の夏に加藤信朗が仙台のドミニコ会修道院から哲学の世界に戻って来た．1年ぶりだった．親友が戻って来た喜びを井上は次のように記している．

「ディアレクティケ（問答対話）は，時に知性の核融合を齎（もたら）すけれども，そのためにはひとりひとりの知性は，磨き抜かれた〈ひとり〉でなくてはならない．加藤君とわたしも，いつも話し合っていたが，道はそれぞれに厳密に孤独であった．一歩一歩を別々独立に刻んでいればこそ，その途が同じ刻みを露わにした場合の喜びはまた格別であった．別に学問上の議論に限らない．加藤君が若き求道者として仙台に退いていて，暫（しばら）く生活も勉強もまったく別の時期があった．帰還してすこし経ったとき，たまたま話題が三島由紀夫の『鏡子（きょうこ）の家』になった際，かれとわたしがまさに同一の箇所（かしょ）に同一の洞察を共にしていたことが分かり，加藤復活と感動したことは忘れられない[16]．」

加藤は東京大学文学部哲学科に在学しているとき，ホイヴェルス神父[17]に出会い，1950年（昭和25年），

10）　この論文の脱稿日は「井上忠教授・資料」東京大学教養学部『人文科学科紀要83　哲学23』1986年，p.158による．

11）　出隆（1892～1980年，東京大学教授，古代ギリシア哲学）．

12）　哲学会編『哲学雑誌』第68巻第719・720号（合併号），古代特集号，1954年．この論文はのちに『挑戦』pp.225-260に再録された．

13）　加藤信朗（1926年～，東京都立大学名誉教授，古代ギリシア哲学）．

14）　そのとき同行した岩田靖夫（いわた・やすお，1932～2015年，東北大学・仙台白百合女子大学名誉教授，古代ギリシア哲学）の回想による．岩田靖夫「夜行列車の響きのなかで」『追悼集』p.18.

15）　加藤信朗「分割の問題（一と多）―プラトン研究―」．今道友信「アリストテレスの研究抄録」．

16）　井上忠「加藤信朗氏『哲学の道』に懐う」『創文』1997年10月号，pp.11-12．井上と加藤の親交については，伊佐敷隆弘「哲学者井上忠の生涯：誕生から最初の論文の完成まで」の第Ⅲ節「哲学科入学から最初の論文まで」第4項「最初の論文の完成」のpp.38-39を参照せよ．

17）　Hermann Heuvers（1890～1977年）．ホイヴェルス神父については，伊佐敷隆弘「哲学者井上忠の生涯：誕生から最初の論文まで」の第Ⅲ節「哲学科入学から最初の論文まで」第3項「カトリックへの改宗」を参照せよ．

哲学科を卒業するころ24歳でカトリックの洗礼を受けた[18]．哲学科卒業後，東京都立大学[19]の助手を2年間務めたのち，1953年（昭和28年）7月にドミニコ会修道院に入った．27歳だった．

そして，1年間の修練生活を終え，短期誓願を立ててカナダに行くことになった．修練生活は修道士になるための準備期間であり，誓願を立てることによって，本格的に修道士になる．短期誓願を何回か更新し，最後に終生誓願を立てる．加藤が迎えていたのは，最初の短期誓願である．しかし，誓願式の当日，どうしても自分の部屋から出ることができなかった．

「式の当日，修室で待っていたのですが，どうしても脚が動きません．修練長が呼びに来ても，部屋から出ることができなかったのです．修道会に入る前，ホイヴェルス神父に挨拶に行った折，『あなたは大学の先生になる人だと思っていました』と言われたことがありました．誓願式の数日前に，ホイヴェルス神父から誓願を祝う葉書をいただきました．それを読んだとき，ホイヴェルス神父とともに過ごした日々が想い起こされ，自分の道は本当にこれでよいのかという思いが心の内に浮かんでいたようです．もちろん自分では誓願を立てるつもりでいましたが，その意志に反して脚が動かなかったのです．そして，すぐに修道院を去りました[20]．」

修道院から戻って来た加藤は，「召命を捨てた」という言葉が自分の心からも他人の口からも聞こえてきて，もだえ苦しんだ．「召命」とは，キリスト教において「神から呼び出されて新しい使命を与えられること」である．そんな加藤をやさしく受け入れたのは，父親とホイヴェルス神父と井上忠だった．そして，幸いなことに翌1955年（昭和30年）4月に加藤は上智大学文学部の専任講師に採用された．

3　牛山章子（ふみこ）との結婚

井上からギリシア語を習っている牛山章子たちは，今道のときと同じように，井上の自宅まで皆で本を借りに行った[21]．井上の自宅は東京都練馬（ねりま）区立野町（たてのちょう）にある．両親と一緒に住んでいた．父光太郎（みつたろう）と母カナメは二人とも広島県呉（くれ）市で教師をしていたが，教師の仕事を辞めて東京に出て来た．そして，家を建て，一人息子の忠と一緒に住み始めたのである．一方，章子は東京都武蔵野（むさしの）市吉祥寺北町（きちじょうじきたまち）に両親と一緒に住んでいた．章子が調べてみると，章子の自宅から井上の自宅まで歩いてすぐの距離だった．やがて，章子は定期的に井上の家に通い，『イソップ物語』を教材にギリシア語の個人授業を受けるようになる．自宅での井上は，教室にいるときと違って，すこぶる機嫌が良かった．章子自身も井上の家に通うのが楽しみだった．

しばらくすると，父親の光太郎が「あのお嬢さん，忠の嫁にいいのではないか」と言い出した．そこ

18）　本項「加藤信朗の哲学への復帰」は，おもに「この人に聞く　イエスとともに生きる，自然のうちに生きる　哲学者・加藤信朗さん（上）（下）」（加藤信朗へのインタビュー，聞き手・黒川京子）オリエンス宗教研究所編『福音宣教』2016年11月号，pp.9-14，12月号，pp.17-22による．このインタビュー記事は加藤氏自身から提供いただいた．

19）　現在の首都大学東京．

20）「この人に聞く　イエスとともに生きる，自然のうちに生きる　哲学者・加藤信朗さん（上）」（加藤信朗へのインタビュー，聞き手・黒川京子）『福音宣教』2016年11月号，p.12.

21）　本項「牛山章子との結婚」は主に井上章子談による．

で，母親のカナメがお茶の水女子大学の学生課まで章子のことを聞きに行った．章子の回想によると，このようなことは当時の女子大では珍しくなかったそうである．井上の母親が来たことはすぐに指導教員の木原研三[22]の耳に入った．章子は木原から「井上先生のお母さんが君をお嫁さんにどうかって調べに来たんだそうだよ．でも，哲学なんてやめなさい．哲学の本なんか売れないよ．貧乏するよ．英文科がいいよ」と言われてしまった．しかし，調べに来た井上の母親は満足して帰ったようであった．

章子は1954年（昭和29年）3月にお茶の水女子大学を卒業し，母校の女子学院に教師として就職した．中学2年生の英語を担当した．しかし，1年後の1955年（昭和30年）4月からは非常勤講師として教えることになった．東京大学大学院の英文科修士課程に入学したからである．大学院への入学には井上からの勧めもあった．

井上と章子は，出会ってから2年後の1955年（昭和30年）4月に結婚した．章子が大学院に入った直後である．二人の結婚式は東京都武蔵野市の吉祥寺カトリック教会でおこなわれた．式では，今道友信や加藤信朗が侍者（ミサの際に神父を手伝う係）を務めてくれた．結婚したとき井上は（お茶の水女子大学で非常勤講師をしていたが）まだ東京大学の大学院生だった．しかし，大学院の1年目から「大学院研究奨学生」に選ばれて給料をもらっていた[23]．当時，公務員の月給が1万円の時代に研究奨学生には毎月1万5千円が支給された[24]．井上には研究奨学生としての収入と両親が建ててくれた家があったから，裕福とまでは言えないにしても，結婚したあとの経済的な心配はあまりなかったであろう．

新婚の井上の家には，加藤信朗や哲学科の同級生である黒田亘[25]がしばしば訪れた．黒田が来たときには，台所にいる章子の耳に二人の大きな笑い声がよく聞こえてきた．井上夫妻が黒田の自宅のある鎌倉へ行ったこともあった．鎌倉の砂浜で二人がボールを投げ合ったり，走り幅跳びのようなことをしたりするのを，章子はそばで見ていた．加藤が井上の家に来たときの部屋は静かだった．井上が「それはこんなふうに考えられないかな」と問いかけると，加藤は「そうですね．少し考えさせてください」と言って静かに考え続けたからである．

---

22) 木原研三（1919～2008年，お茶の水女子大学名誉教授，英語学，『コンサイス英和辞典』編者）．

23) 「井上忠先生年譜」『追悼集』2014年，p.101，および今道友信『知の光を求めて』中央公論新社，2000年，p.64などによる．なお，「井上忠先生年譜」（井上自身が書いた「履歴書」を元に作成された年譜）には「研究奨励生」とあるが，正しくは「研究奨学生」である．また，井上は哲学会編『哲学雑誌』第68巻第719・720号（合併号），1954年の編集委員を務めた際「編集後記」末尾の執筆者紹介で「井上忠は昭和二十六年卒業．現在東大特別研究生．（井上記）」と自ら書いているが，実は特別研究生の正式名称は変遷している．1943年（昭和18年）10月の制度発足から1948年度（昭和23年度）までは「特別研究生」だが，1949年度（昭和24年度）だけ「特別研究奨学生」で，1950年度（昭和25年度）から1958年度（昭和33年度）の制度廃止までは「研究奨学生」だった．ただし，「特別研究生」は通称として使われ続けていた（井上章子談）．正式名称の変遷については，小川智瑞恵「資料『大学院特別研究生関係』史料目録（1943～1945年度）」東京大学史史料室編『東京大学史紀要』第17号，1999年，pp.65-113の特にp.65による．

24) 井上章子談．

25) 黒田亘（1928～1989年，東京大学名誉教授，英米哲学）．井上によると，哲学科の学部生のときに，井上の方から黒田に「友達になろう」と声をかけた．このことは筆者（伊佐敷）が井上から直接聞いた．ちなみに，黒田は筆者の指導教員である．筆者は学生のとき黒田の指導のもとでヴィトゲンシュタイン（Ludwig Wittgenstein, 1889～1951年，オーストリア出身，ケンブリッジ大学教授）の哲学を研究した．

4　初めての全国学会研究発表

井上が全国学会で初めて研究発表をしたのは，1956 年（昭和 31 年）11 月 10 日，第 7 回日本西洋古典学会においてである[26]．会場は兵庫県神戸市の神戸大学だった．井上は 30 歳になっており，大学院もこの年の 3 月に修了していた．発表のタイトルは「プラトンの方法をめぐって」である．学会に行く前，妻の章子に向かって，発表を宮本武蔵の巌流島にたとえたり，「喧嘩して来る」と言ったりした[27]．初めての全国学会での研究発表に向けた井上の自信と意気込みがうかがわれる．

章子は東京駅まで行き，二人して列車の窓から首を出す井上と加藤を見送った．井上は宝塚歌劇団が好きで，学会の帰りに神戸市から宝塚市まで足を伸ばして観劇してきた．この時期，章子は身ごもっており，井上は「女の子だったら宝塚に入れる．名前は『さゆり』にする」と言っていたが，翌 1957 年（昭和 32 年）2 月に産まれたのは男の子だった．男の子は，井上の最初の活字論文「アリストテレスの『有』把握」から「有」の字をとり，「有哉」と名付けられた．ただし，読み方は「ゆうや」ではなく「なおや」にした[28]．また，有哉が生まれる直前の 1 月に井上は東京大学教養学部の専任講師（「哲学」担当）に採用されていた[29]．

このように，30 歳の井上は公私ともに充実していた．ただ，初めての全国学会での研究発表は，「喧嘩して来る」という言葉のとおり，かなりの批判を浴びた．のちに井上自身「幸いに幾多諸賢の論争を忝うした[30]」とか，「一九五六年の古典学会においてわたくしの発表した『プラトンの方法をめぐって』以来，小生の矯説に顰みを送られたプラトン学者諸兄[31]」と書いている．

この発表は，アリストテレス[32]の『形而上学』第 1 巻第 6 章の新しい解釈を提案するものだった．井上の新解釈は大胆であり，藤澤令夫[33]（当時 31 歳）によれば，「きわめて独得のもの」であって，「これまで何びとも思い至らなかったような原文解釈」であった[34]．

この学会発表は，翌 1957 年（昭和 32 年）3 月に『西洋古典学研究』に同じタイトルの論文[35]として掲載された．そして，1960 年（昭和 35 年）に藤澤令夫が，ギリシア語文法と文献学的観点から井上の論文を細かく丁寧に検討した批判論文[36]を書いている．藤澤はアリストテレス『形而上学』の数カ所に

26）学会は 1956 年（昭和 31 年）11 月 10 日の土曜日と 11 日の日曜日の 2 日間にわたって開かれた．

27）井上章子談．

28）井上章子談．

29）「井上忠先生年譜」『追悼集』2014 年，p.101.

30）井上忠「プラトンの方法をめぐって」『挑戦』p.128.

31）井上忠「出で遭いへの訓練」『挑戦』p.143.

32）Aristoteles（前 384 ～前 322 年，ギリシアの哲学者）．

33）藤澤令夫（1925 ～ 2004 年，京都大学名誉教授，古代ギリシア哲学）．

34）藤沢令夫「Aristoteles, *Metaphysica* A6 再考―井上忠氏の所説について―」日本西洋古典学会編『西洋古典学研究』第 8 巻，1960 年，p.43.（『藤澤令夫著作集　第 I 巻』p.341.）

35）井上忠「プラトンの方法をめぐって」日本西洋古典学会編『西洋古典学研究』第 5 巻，1957 年，pp.74-86.（『挑戦』pp.113-130 に再録．）

36）藤沢令夫「Aristoteles, *Metaphysica* A6 再考―井上忠氏の所説について―」日本西洋古典学会編『西洋古典学研究』第 8 巻，1960 年，pp.43-60（「アリストテレス『形而上学』A 巻六章再考――井上忠氏の所説について」というタイトルで『藤澤令夫著作集　第 I 巻　実在と価値』岩波書店，2000 年，pp.341-368 に再録）．論文発表当時の藤澤は九州大学文学部の助教授である．

関する井上の解釈を取りあげ，それぞれについて，「〔このように〕解することは，どうみても『通常の語法』ではない」とか，「〔このように〕訳されてよい根拠はどこにもない」と言い，ついには，「〔このように〕解釈することは，その意図は大いに共感を呼ぶものがあるけれども，しかしそれを支える原典上の根拠と裏付けは―もし直言することを許していただけるなら―ほとんどゼロに近いと言わなければならない」と批判する．要するに，藤澤の批判の要点は，「井上の解釈はギリシア語の読み方として無理がある」ということである．井上はこの批判に対し，のちに次のように答えている．

「藤沢令夫氏〔の〕友情溢（あふ）るる反論〔…〕．氏の透徹した理解と論旨を，多くのひとたちの部分とみる失礼は，断じて冒したくない．氏の反論に対しては，ただ，もしひとあってお読みになるなら，氏の論文を読んでから，小生のあの旧い拙論〔「プラトンの方法をめぐって」〕をお読みいただけば，と祈念するだけである．わたしの企図は，まさにそのとき，もっとも鮮烈に，現成（げんじょう）するであろう[37]．」

井上は，藤澤の批判を評価しつつも受け容れない．二人の対立はアリストテレス解釈をめぐるものだが，実は，その背後に，「哲学とは何か」に関する考え方の違い，すなわち，哲学観の違いがある．そこで，次に井上の哲学観を見てみよう．

Ⅱ　哲学とは何か

1　井上忠の哲学観

井上が 30 歳から 31 歳にかけて書いた 3 つの論文を主な素材にする．すなわち，「プラトンへの接近[38]」，「愛智の道無さ（アポリア）をめぐる一考察――プラトンの場合[39]」，「哲学すること[40]」の 3 つである．これらの論文は，その後，井上の著書に再録されることはなかった．若いときの粗削りの論文だからであろう．しかし，それだけに哲学に対する当時の井上の考え方がはっきりと表れている．井上は言う．

「愛智〔哲学〕の道には『哲学』一般ということはあり得ない．この道はあくまでもわたし達ひとりひとりの道である．ひとりひとりの徹底的に主体的な現実として，愛智者のそれぞれが出会う真実の風光である．しかもこの道は，そこに，わたしの前に，在るのではない．わたしの踏み分けるところが道となるのであり，わたしの後にその足跡はふたたび消えるのである[41]．」

哲学は，ひとりひとりの主体的な現実としてのみ実行可能なものであり，誰にでも当てはまる「哲学一般」というようなものはあり得ない．それゆえ，私が踏み分けて切り開いた道も私の後に再び消える．後に続く他の人のためにその道を残しておくことはできない．だから，哲学には「きまった道がない〔…〕，

37）井上忠「出で遭いへの訓練」『挑戦』pp.143-144.

38）井上忠「プラトンへの接近」『東大紀要』第 12 号，1957 年，pp.263-299．脱稿日は 1956 年（昭和 31 年）11 月 13 日．

39）井上忠「愛智の道無さをめぐる一考察」『理想』第 286 号，1957 年 3 月，pp.64-79．脱稿日は 1957 年（昭和 32 年）2 月 6 日．なお，井上忠「プラトンへの接近」p.291 の注記などによると，「プラトンの方法をめぐって」，「プラトンへの接近」，「愛智の道無さをめぐる一考察」の 3 つの論文は，もともと「イデア――プラトン研究」という井上の未公刊の論文の一部をなしていた．

40）井上忠「哲学すること」澤田和夫編『現代カトリシズム序説』創元社，1957 年 10 月，pp.53-70．脱稿日は不明．

41）井上忠「哲学すること」p. 57.

更に窮極的には何らの道もない[42]」ということになる．

したがって，各自が切り開いた道において各自に見えたものを，他人に伝えるすべはない．

「ここにはただ一人称単数形の存在開披があり，発語が存するのみである．〔…〕愛智の道に披(ひら)かれる実在の風光は，固(もともと)，通常の共通的な言語を超える[43]」，「真の愛智が把握する存在の内実の豊かさは，到底言葉の貧弱さに盛ることはできぬ[44]」

哲学の道は一人称単数形すなわち「私」に対してのみ開かれる．それゆえ，私がその道において出会う実在の風光は「共通的な言語」すなわち人々の間での伝達流通を目的とする通常の言語を超えている．だから，「愛智の内実を，他のひとに伝え告げる道がない[45]」ということになる．

では，哲学者は言葉を一切使わず，沈黙のうちに哲学を営むべきだということになるのだろうか．そうではない．井上によれば，哲学は「孤独に於いてではなく，交わりに於いて，対話に於いて，自らの道を拓(ひら)くもの[46]」である．ただし，対話は知識の伝達ではない．

「対話は講義の如き一定の知識内容授受の場面ではない．対話はどこまでもそれぞれに愛智しつつある対話者をおのおの自らの主体的な愛智の現実へ還帰せしめ，徹底させるのである．〔…〕対話によって得られる知識は外からではなく，ただ対話者が自らの裡(うち)に発見するのである[47]．」

対話において，一方の対話者の知識がもう一方の対話者に伝達されるのではない．対話に鍛えられて，各自が自分自身で発見するのである．井上は哲学における対話の重要性を強調する．

「窮極の真実が語られぬものであればあるだけ，愛智者はミソロゴス〔言葉嫌い〕とは反対に，生涯賭けた対話の裡に，これ〔窮極の真実〕を指標すべく努めなければならないのである[48]．」

したがって，過去の哲学書との向き合い方，すなわち，哲学史の研究もこのような意味での対話としてのみ可能になる．

「哲学史も，この愛智の対話形式の一つとしてのみ成立する．〔…〕一般的な哲学史というものは存在しない．哲学史は，ただ，愛智の言葉として遺された歴史的資料〔古典的テキスト〕の裡へ沈潜しつつ，わたし達がそれぞれに行う愛智の対話の内容としてだけ成立するものなのである[49]．」

前述のように，井上によれば，哲学は各人の主体的な現実としてだけ実行可能である．主体的に哲学を営んでいる哲学者同士として，過去の哲学者たちと対話すること，それだけが「哲学史研究」の名前にふさわしい．「哲学一般」というものがありえないのと同様，「哲学史研究一般」というものもありえない．井上は「対話としての哲学史研究」を「詩人の営み」にたとえる．

「恰(あたか)も詩人が，詩の一つ一つの言葉を行住坐臥(ぎょうじゅうざが)に愛して，これを自(みずか)らの全詩的体験の裡に磨き，い

42) 井上忠「愛智の道無さをめぐる一考察」p.64.
43) 井上忠「哲学すること」pp.57-58.
44) 井上忠「愛智の道無さをめぐる一考察」p.75.
45) 井上忠「愛智の道無さをめぐる一考察」p.64.
46) 井上忠「愛智の道無さをめぐる一考察」p.68.
47) 井上忠「哲学すること」p.58.
48) 井上忠「哲学すること」p.61.
49) 井上忠「哲学すること」p.59.

ささかのまがいものもまざらぬ純粋な自らの言葉とする如く，私達もまた生涯を通ずる愛智の努力の裡に，哲人〔過去の哲学者たち〕の遺せる愛智の言葉を，何ら他者性の曇りなき全き自らの言葉とするように努めなければならない．斯(か)くしてのみ詩そのものの，また愛智そのものの言葉が獲(え)られるのである．そこに『対話』としての愛智の神髄(しんずい)に触れる道も秘められていると言えるであろう[50]．」

主体的に哲学を営んでいる哲学者同士として過去の哲学者たちと対話することによって，初めて哲学の言葉を自分のものにすることができると言うのである．これに対して，自分自身の主体的な哲学の営み抜きで過去の哲学者たちの言葉に接するならば，「思想的内容の形骸的知識[51]」が得られるだけである．それは人をかえって哲学から遠ざけてしまう．

思想内容の形骸的知識と哲学とはまったく異なる．井上がたびたび依拠するプラトン[52]の書簡[53]において，「ただ連日陽(ひ)にあたって身体(からだ)の表面が陽焦(ひや)けしてしまったひとたちのように，いろいろの見解でうわべだけを色づけされている者たち[54]」は，実は「愛智者でない」とプラトンは述べる．そして，井上によれば，そのような者たちは「亜流たる偽(にせ)の愛智者[55]」であり，彼らが携わっているのは，「ひとを益々虚栄に膨れ上がらせる学識，一度その門に入るや真理を求めると号していよいよ博識に，論理ますます精緻に，そしてもはや端的な『何か？』――真理――へ向かっては一顧をも許さぬ学識の道[56]」であって，哲学とはまったく別のものである．

井上は哲学史の研究が不要だと言っているわけではない．哲学の言葉を自分のものにするためには，（詩人の努力と似たような）対話としての哲学史研究が不可欠である．しかし，自ら哲学をしていない者が哲学史を研究すると（言い換えれば，対話としての哲学史研究でない場合），哲学とは似て非なる結果（形骸的知識の蓄積）が生じてしまうと言っているのである．

以上を要約しよう．哲学は各々(おのおの)の「私」に対してのみ開かれる．それゆえ，哲学は一般流通言語を超える．しかし，哲学は対話において営まれなければならない．そして，哲学史研究も過去の哲学者との対話としてのみ可能である．これが当時の井上の哲学観である．

哲学のこのような性格を，井上は太陽の前の朝顔の花に喩(たと)えている．

「愛智の努力は，未だ見ぬ曙(あけぼの)の光に向って花開こうとする朝顔の蕾(つぼみ)の，ひそやかに充ちる営みにも似ている．〔…〕この花はやがて，自らの露の生命(いのち)をこめて咲き迎えるかの大いなる光の前に，歓喜に燃えつつ昇華し，死にゆくであろう．あとにはただ萎(な)え凋(しぼ)んだ形骸が博物学者の手に残るのみである．日はまた昇る．しかし久遠(くおん)の太陽に出遭う歓びを，ひと知らぬ須臾(しゅゆ)のあさけのひととき〔夜明けの短い時間〕に咲き散ったこの小さき花の心を知るものこそ，真理に咲き向う愛智の歓びと悲しみを知るものと

50) 井上忠「プラトンへの接近」p.278.
51) 井上忠「愛智の道無さをめぐる一考察」p.71.
52) Platon（前 427 ～前 347 年，古代ギリシアの哲学者）.
53) 井上は，自分の哲学観を述べる際，プラトンの「第七書簡」に言及し，「これはまさに基督教のパウロ書簡に当る」と言う．井上忠「愛智の道無さをめぐる一考察」pp.74-76.
54) プラトン「第七書簡」340d．訳は，長坂公一「書簡集」『プラトン全集 14』岩波書店，1975 年，p.146 による．
55) 井上忠「プラトンへの接近」p.290.
56) 井上忠「存在の歌」『挑戦』p.78．この論文は 32 歳のときに書かれた．

言えるであろう[57]．」

今ここにおける私（「朝顔」）と実在（「太陽」）との出会い，そこにのみ哲学があり，その出会いを越えた伝達のための言葉は「萎え凋んだ形骸」に過ぎない．各自の哲学の営みが先行した上で，そのような哲学者の間の対話という意味においてのみ哲学の言葉は可能である．哲学史研究とは，言わば，朝日の前で咲き散った他の朝顔の心を知ることである．井上はこのように考えている．

2　松永雄二との出会い

井上は 30 代に，古代ギリシア哲学の研究者である松永雄二[58]と知り合った．松永が井上のことを知ったのは，井上が初めて全国学会で研究発表をしたとき，すなわち，前述[59]の「プラトンの方法をめぐって」を発表した 1956 年（昭和 31 年）である．井上は 30 歳で，松永は 27 歳だった．松永は言う．

「井上忠が，際立った発表をしたんですね．田中美知太郎[60]先生は，非常に面白いからもう一回京大あたりでやろうって言って．僕は，ああいう形で新しさを誇示するのだったら，僕にだってできるという気持ちがあって，ちょっと面白くなかったんですけどね[61]．」

松永は田中美知太郎の弟子であり，当時，京都大学の大学院生だった．松永は，のちに井上の盟友となるが，最初の出会いの際は心穏やかでなかったようである．

この発表の 10 年後，1966 年（昭和 41 年）の日本哲学会第 25 回大会（会場は東京都立大学）で松永が「イデアの離在と分有について[62]」というタイトルの発表をした．すると，「ものすごく評価してくれたのが，〔…〕黒田，井上とか東大の連中だった．〔…〕昔から仲よかったんですが，決定的に深まった[63]」．この発表によって井上と松永は盟友になった．松永は言う．

「それは何かその当時の京大の連中には一種のスキャンダルにうつったらしい．わたしは田中美知太郎先生から『何故，東大の連中（井上忠，加藤信朗）と仲よくするのか』と詰問されたことがある．わたしはその時とっさに，『彼らは宵越しの銭は持たないから』と答えた．その当時わたしの周囲にいた連中は何かせっせと勉強して，つまり小銭をためて，それでギリシヤ哲学者になるのだという風潮が支配的だった．（むろん例外はある）．わたしはいつか論文を書くということは，自分がすっからかんにならなければ書けないと思うようになった．井上忠氏の言葉をかりれば，そのとき初めて，プラトンやアリストテレスの哲学の現場が見えてくるということなのだ[64]．」

また，松永は言う．

57）　井上忠「愛智の道無さをめぐる一考察」の冒頭，p.64.

58）　松永雄二（1929 年～，九州大学名誉教授，古代ギリシア哲学）．

59）　第 I 節「研究者としてのスタート」第 4 項「初めての全国学会研究発表」.

60）　田中美知太郎（1902 ～ 1985 年，京都大学名誉教授，古代ギリシア哲学）．

61）　「哲学の難しさ・面白さ」（松永雄二へのインタビュー）西日本哲学会編『哲学の挑戦』春風社，2012 年，p.445.

62）　同じタイトルの論文として，日本哲学会編『哲学』第 17 巻，1967 年，pp.20-41 に掲載され，のちに松永雄二『知と不知―プラトン哲学研究序説』東京大学出版会，1993 年，pp.107-129 に再録された．論文発表当時の松永は九州大学文学部の助教授である．

63）　「哲学の難しさ・面白さ」（松永雄二へのインタビュー）p.445.

64）　松永雄二「哲学の披け――井上忠氏を想う」『追悼集』p.81.

「あの論文〔「イデアの離在と分有について」〕以来，論文を書くというのは，自分のことを書くことだって思って，弟子にもそう言ってやったんです．自分がわからなかったら何もわからないんだって感じがしたんですよ[65]．」

哲学に対する松永のこの姿勢には，井上の「哲学は各人の主体的な現実としてだけ実行可能だ」という哲学観と通じるものがある．松永は言う．

「〔「イデアの離在と分有について」を書く前〕，筆者は自分の論文に対して或る種の不満を感じていた．それ〔自分の論文〕は，畢竟（ひっきょう）プラトンの思索をなにか外側からみているものにすぎないと思えたのである．〔…〕〔「イデアの離在と分有について」を書いた後〕，筆者はイデアの『ある』こと（＝存在）がわれわれにとって，否もっと正確にいえば，このわたしにとって，何処（どこ）で本当に問題になるのかということを，いわば一重（ひとえ）に追おうと決心した[66]．」

井上は松永雄二や加藤信朗との関係についてこう述べる．

「加藤・井上の『棒組（ぼうぐみ）』（故大森荘蔵（おおもりしょうぞう）[67] 氏のことば）には，すこしあとに九州の松永雄二氏が加わって，わがくにでギリシアを素材に哲学するトリオが成立する[68]．」

ギリシア哲学はあくまでも「哲学する素材」である点が井上の特徴である．井上を追悼する文章の中で松永は言う．

「われわれは井上忠氏を絶対に忘れることは出来ない〔…〕．それはわれわれが，哲学そのものの披（ひら）けを信じ，それにひとりひとりが真実にあずかろうとする限りそうなのである[69]．」

松永がここで強調しているのは「ギリシア哲学」でも「プラトン哲学」でもなく，「哲学そのもの」である．井上が追究していたものが何であるか，松永の言葉にも表れている．

3　藤澤令夫の哲学観

前述[70]のように，井上の大学教師生活は27歳のときに始まったが，そのとき，井上は，「今でも私は職業哲学者先生になる意図は毛頭ない．唯々（ただただ）遠き呼声（よびごえ）を追って，一つ一つ誠実さを尽くして真実につこうと努力するのみである」と書いている[71]．井上の言う「職業哲学者先生」とは，本節第1項「井上忠の哲学観」で述べた「亜流たる偽の愛智者」のことであろう．

しかし，だからといって，井上は，自分の初めての全国学会での研究発表[72]を「ギリシア語の読み方として無理がある」と批判した藤澤のことを「職業哲学者先生」「亜流たる偽の愛智者」だと見做して

65）「哲学の難しさ・面白さ」（松永雄二へのインタビュー）p.446.
66）松永雄二「あとがき」『知と不知――プラトン哲学研究序説』東京大学出版会，1993年，p.278.
67）大森荘蔵（1921～1997年，東京大学教養学部名誉教授，分析哲学）．「棒組」とは「駕籠をかつぐ相棒」のことである．
68）井上忠「加藤信朗氏『哲学の道』に懐う」『創文』1997年10月号，p.13.
69）松永雄二「哲学の披け――井上忠氏を想う」『追悼集』p.82.
70）第1節「研究者としてのスタート」第1項「教師生活の始まり」.
71）井上忠「武蔵野雑感」『刻み4』p.186．この文章が書かれたのは，1958年（昭和28年）7月であり，井上がお茶の水女子大学でギリシア語を教え始めた3カ月後である．
72）井上忠「プラトンの方法をめぐって」第7回日本西洋古典学会1956年（昭和31年）11月10日.

いるわけではない．というのは，前述[73]のように，井上は藤澤について「多くのひとたちの部分とみる失礼は，断じて冒したくない」と言っているからである．（もっとも，藤澤以外の「プラトン学者諸兄」の「多くのひとたち」に関しては「職業哲学者先生」「偽の愛智者」だと井上は見做していたようである．）

ここで藤澤の履歴をふりかえってみよう[74]．藤澤は 1925 年（大正 14 年）6 月 14 日生まれであり，1926 年（大正 15 年）3 月 25 日生まれの井上と同じ学年である．井上は東京の旧制第一高等学校から東京大学へ進み，他方，藤澤は京都の旧制第三高等学校から京都大学へ進んだ．しかし，藤澤は 1945 年（昭和 20 年）3 月に旧制第三高等学校を卒業すると同時に徴兵され中国大陸に渡った．そして，8 月の敗戦とともに軍隊を除隊され，中国で 1 年間を生き延びた．

「昭和二〇年九月，軍籍を離れた私は，途中所持品のすべてを強奪されたうえで，身体一つで奉天（瀋陽）にたどり着いた．〔…〕私自身は若かったから，困難と危険に耐えて生きていくだけの活力と楽天があった．街がいくらか落ち着いてからは，どこかからいろいろの物を仕入れてきて，道ばたに露店を出して売った．〔…〕だがその間，難民の老人や婦女子に対しては，事態は酷薄非情に進行していた．おびただしい死者．せっぱ詰まって母親が幼い児を捨て，あるいは病気や飢えで死んでいくのを文字どおり見殺しにしなければならなかったありさまも，一度ならずこの目で見た[75]．」

藤澤は中国での過酷な一年を経て，1946 年（昭和 21 年）7 月に引き揚げ船で日本に帰還した．翌 1947 年（昭和 22 年）4 月に京都大学文学部に復学したが，大学の授業に出る気にはならなかった．

「留守の間に私の学籍は，旧制三高から京大の哲学科に移っていたが，満州でのおぞましい生活の反動で虚脱状態がつづき，とても授業に出る気持ちにはなれない．戦争に同調する気配が濃厚だった，それまでの京大の哲学への不信感もあった[76]．」

藤澤の言う「それまでの京大の哲学」とは，いわゆる京都学派のことである．京都学派とは京都大学に所属する哲学研究者のグループであり，メンバーは，西田幾多郎[77]と田邊元[78]を中心に，高坂正顕[79]，西谷啓治[80]，高山岩男[81]たちであった．

「私は外地からの復員後，この京都学派の哲学が戦時中，偏狭な国粋思想への対抗重量たりえず，むしろ同調の気配が濃厚であったことに，敗残兵としての怨念と不信をいだいていたのである[82]．」

藤澤はどうしようもない虚無感の中で復員後の数年間を過ごした．そして，この虚無感の中で自己の生き方を求めて，一つの試みをおこなう．

---

73) 第 I 節「研究者としてのスタート」第 4 項「初めての全国学会研究発表」の末尾．
74) 藤澤の履歴は，藤澤令夫『藤澤令夫著作集　第Ⅶ巻　自然・文明・学問』岩波書店，2001 年による．
75) 藤澤令夫「生活と想念―京都・一九八二年―」『藤澤令夫著作集　第Ⅶ巻』pp.271-272.
76) 藤澤令夫「赤い夕日の満州で」『藤澤令夫著作集　第Ⅶ巻』pp.340-341.
77) 西田幾多郎（1870 ～ 1945 年）．この時期までの主な著書は『善の研究』（1911 年）と『自覚に於ける直観と反省』（1917 年）．
78) 田邊元（1885 ～ 1962 年）．この時期までの主な著書は『社会的存在の論理』（1934 年）と『懺悔道の哲学』（1946 年）．
79) 高坂正顕（1900 ～ 1969 年）．この時期までの主な著書は『カント解釈の問題』（1939 年）と『民族の哲学』（1942 年）．
80) 西谷啓治（1900 ～ 1990 年）．この時期までの主な著書は『根源的主体性の哲学』（1940 年）．
81) 高山岩男（1905 ～ 1993 年）．この時期までの主な著書は『世界史の哲学』（1942 年）．
82) 藤澤令夫「現代のことば」『藤澤令夫著作集　第Ⅶ巻』p.322.

「昼間は食べるために会社員として働かなければならず，それに，長らく外地で生存のためのおぞましい闘いに明け暮れていた反動は強烈で，しだいにどうしようもない虚無感に引き込まれていった．それは虚脱感とも違う鬱積した強い情動であって，私はこの情動に対して誠実であることだけが，自分自身に誠実な生き方であると，かたくなに信じるようになった．〔…〕人びとの営みの世界，対人関係と社会生活の世界，道徳や学問を含めて，すべて合理と正気の世界，――この『昼』の世界に対して，いわば虚無と狂気が支配原理となるような『夜』の世界を対置し，自分はその中に生きなければならない，と私は考えた．それを“実行”するために私は，薬その他あらゆる手段をいとわずに，夜半から明け方までに最上の活力を集中して，連夜，ひとり目ざめて過ごす無垢の時間を確保することにした[83]．」

この経験の中から，藤澤は哲学への入り口を見いだしていった．

「実際に死ぬことなくして，『昼』と『夜』の世界を行き来しているのは，中途半ぱな矛盾というべきだろう．そのことは，痛いほど分かっていた．疲労が積もって険しく痩せていきながら，しかし私の思いはしだいに，そのような“矛盾”を私に余儀なくさせている，『人間であること』の基底にある仕組みとか，からくりといったものに向けられていった．〔…〕これが私なりの，『哲学』への入り口だった[84]．」

そして，その「哲学」は藤澤にとってギリシア哲学であった．

「単純に二分された正気と狂気，理性と感性のどちらか一方でなく，両者のある稀な相乗を動因として，生と死との，世界と自分との入り組んだ関係を，基本的に正確にとらえ直すような哲学．そしてそれに応えてくれる思想の軌跡は，私にはギリシア哲学しかなかった．敗戦直後の二〇代前半，ほぼ一年間集中的につづいた稚拙で危険な経験だったが，私にとっては，どうしても通過しなければならなかった経験ではあった[85]．」

藤澤がギリシア哲学を選んだのは，田中美知太郎の存在が大きかったと思われる．1947年（昭和22年）9月に京都大学に着任した田中は京都学派をきびしく批判した．たとえば，「自己独特の思想などを誇るのは，浅薄な虚栄心に過ぎず，前人未到の新奇をもとめる功名心は，哲学の動機としては，甚だ俗悪である[86]」と書いた．田中のこの発言について，藤澤は「無意味に難解な特殊語法で綴られる京都学派の“独創的”哲学について行けなかった私は，こうした発言に共感し，勇気づけられた[87]」と言う．

こうして，藤澤はギリシア哲学を学ぶために1949年（昭和24年）4月から教室に戻り，田中美知太郎の演習に出るようになった．

「田中美知太郎先生によるプラトンの演習は〔…〕まず何よりも原文の一語一語の意味と語法を正確に確かめることを求める，その極度の実直さのようなものが，かえって清新に感じられたものであ

83) 藤澤令夫「自分と出会う―狂気，不合理への模索―」『藤澤令夫著作集　第Ⅶ巻』pp.303-304.
84) 藤澤令夫「自分と出会う―狂気，不合理への模索―」『藤澤令夫著作集　第Ⅶ巻』p.304.
85) 藤澤令夫「自分と出会う―狂気，不合理への模索―」『藤澤令夫著作集　第Ⅶ巻』p.304.
86) 田中美知太郎「あとがき」『ロゴスとイデア』岩波書店，1947年，p.340.
87) 藤澤令夫「現代のことば」『藤澤令夫著作集　第Ⅶ巻』p.322.

る[88]．」

藤澤にとって,「文献学的手続きを重視すること」と「主体的に哲学すること」とは一致すべきことだった.

「『自己の生死と関係する主体的な』営みとしての哲学を，何とかこれまでとは違った本格的な〈哲学〉へと鍛え上げて追求したいと思い定め，そのためにギリシア哲学を自分の専攻として再出発することに決めたのであった[89]．」

つまり，藤澤にとっても哲学は主体的な営みとしておこなわれるべきものであった．ただし,「主体的な営み」の具体的あり方に関して藤澤と井上とは異なっている．とりわけ古典的テキストとの距離の取り方に関する違いが大きい．藤澤の眼からは，井上の場合，テキストからの距離が開きすぎているように見えるのである．実際, 井上はこの点に関して生涯を通じて他の研究者からしばしば批判を浴びた. 例えば, 井上の追悼シンポジウム[90]の司会をした神崎繁（かんざきしげる）[91]は, 井上の著書『パルメニデス[92]』について,「先生の古典学への造詣と哲学それ自体への情熱，さらに先生の研ぎ澄まされた言語感覚とが稀有な形で融合した，渾身の作だと思いますが，同時に文献学的な手続きにおいて，不遜ながら異議を差し挟みたい箇所が散見されるのも事実です」と書いている[93]．

しかし，井上からすれば，テキストから離れているつもりはないのである．井上によれば，哲学史の研究は「文献学的，歴史学的研究を自らの裡に極度に駆使しつつも常にすぐれて私達自身の愛智の努力に裏付けられたものでなければならない[94]」．というのは，古典的テキストの解釈をめぐって研究者が議論するさまざまな問題の奥に「歴史学や文献学の領域のみでは如何（いかん）ともなし難い，愛智理解そのものの問題が直結している[95]」からである．古典的テキストを読む際に文献学や歴史学を重視することは当然の前提である．しかし，哲学のテキストの正確な理解は，文献学や歴史学だけでは不可能であり，解釈者自身が哲学を主体的に営んでいることが絶対に必要である.「みずから哲学を営んでいない者が哲学史を研究することは不可能だ」ということは，井上にとって譲れない主張であり，この点を曖昧にしたまま哲学史の研究方法について論じることは，出発点において既に間違っている．そして，井上は，自分の読み方は決してテキストから離れた恣意的な読み方ではなく，むしろテキストの著者の真意を捉える読み方であると考えていたのである.

88）「年譜」『藤澤令夫著作集　第Ⅶ巻』p.*11*.

89）藤澤令夫「交遊今昔」『藤澤令夫著作集　第Ⅶ巻』p.365.

90）2015 年（平成 27 年）11 月 1 日東京大学文学部における哲学会第 54 回研究発表大会シンポジウム「根拠・言語・存在――井上忠の哲学」. 提題者は，納富信留（のうとみ・のぶる，1965 年～，東京大学教授，古代ギリシア哲学），中畑正志（なかはた・まさし，1957 年～，京都大学教授，古代ギリシア哲学），伊佐敷隆弘（いさしき・たかひろ，1956 年～，日本大学教授，分析哲学）の 3 名．シンポジウムの内容は，哲学会編『根拠・言語・存在』（哲学雑誌，第 131 巻，第 803 号）有斐閣，2016 年にまとめられた.

91）神崎繁（1952 ～ 2016 年，専修大学教授，古代ギリシア哲学）.

92）井上忠『パルメニデス』青土社，1996 年（新装版 2004 年）.

93）神崎繁「井上哲学シンポジウムの司会にあたって」哲学会編『根拠・言語・存在』（哲学雑誌，第 131 巻，第 803 号）有斐閣，2016 年，p.6.

94）井上忠「プラトンへの接近」pp.277-278.

95）井上忠「愛智の道無さをめぐる一考察」p.69．傍点は井上自身による.

「哲学において，古典的テキストとどのように関わるか」という方法論上の問題は，究極的には，「哲学にとって言葉はどのような意味を持つか」という問題に帰着する．この点に関して井上と（藤澤も含め）他の多くの哲学研究者との間にかなりの考え方の違いがあったように思われる．「哲学にとって言葉が持つ意味」についてどう考えるかは，「哲学とは何か」についてどう考えるかを，すなわち，その人の哲学観を，大きく左右する．多くの哲学研究者の内で，井上ほど「言葉の弱さ」を深刻に受け止めた者はいなかったのではないか．井上は「哲学と言葉」というこの問題と最晩年まで格闘し続けていくのである．

Ⅲ　「イデアイ」への道

1　若手研究者として

井上が 27 歳で書いた最初の活字論文はアリストテレスに関するものだった[96]が，30 代前半の井上はプラトンとパルメニデス[97]について集中的に研究している．この時期に書いた論文は次のとおりである．（かっこ内に執筆時の年齢を付記する．）

「プラトンの方法をめぐって――アリストテレスのプラトン理解の一断面[98]」（30 歳）

「プラトンへの接近[99]」（30 歳）

「愛智の道無（アポリア）さをめぐる一考察――プラトンの場合[100]」（30 歳）

「哲学すること[101]」（公刊時 31 歳[102]）

「パルメニデスの歌――序章の部[103]」（31 歳）

「存在の歌――パルメニデスをめぐって[104]」（32 歳）

「プラトンへの挑戦――質料論序論[105]」（33 歳）

「イデア数の謎――プラトンへの挑戦（二）[106]」（34 歳）

「哲学の方法の誕生[107]」（35 歳）

「『一』の秘密――プラトンへの挑戦（三）[108]」（35 歳）

また，35 歳（1961 年昭和 36 年）ころから古典的テキストの翻訳にも地道に取り組んだ．加藤信朗と

96）井上忠「アリストテレスの『有』把握」．（『挑戦』p.225-260 に再録．）
97）Parmenides（前 515 頃～前 445 年頃，古代ギリシアの哲学者）．
98）日本西洋古典学会編『西洋古典学研究』第 5 巻，1957 年，pp.74-86．（『挑戦』pp.113-130 に再録．）
99）『東大紀要』第 12 号，1957 年，pp.263-299.
100）1957 年（昭和 32 年）2 月 6 日に脱稿し，同 3 月に『理想』第 286 号，pp.64-79 に掲載された．
101）澤田和夫編『現代カトリシズム序説』創元社，1957 年 10 月，pp.53-70.
102）脱稿日は不明である．
103）『東大紀要』第 15 号，1958 年．（『挑戦』pp.39-73 に再録．）
104）『東大紀要』第 18 号，1959 年．（『挑戦』pp.74-109 に再録．）
105）『東大紀要』第 20 号，1960 年．（『挑戦』pp.3-36 に再録．）
106）『東大紀要』第 22 号，1961 年，pp.207-253.
107）『理想』第 341 号，1961 年，pp.13-22.
108）『東大紀要』第 27 号，1962 年，pp.219-245.

一緒にアリストテレスの『分析論』の翻訳を始めたのである．

「この訳出作業は，まさにふたりの精根の擦り合わせであった．ことに『〔分析論〕後書』の冒頭の理解は難渋を極めた．駒場の研究室で最初の読み合わせをしたとき，僅か数行の解釈に延々と討議を重ね，疲労困憊しながらやっと，『そうか，アリストテレスはこれを考えていたのか』とふたりが長いトンネルを抜けたのは，さしもの春の日もとっぷりと暮れた後であった．しかしそのときふたりが実感したのは，問答吟味という方法の凄まじさと，それを支えていたプラトン・アリストテレスの学園における知性の高さであった[109]．」

若手研究者として哲学に没頭している井上の姿が見える．この翻訳は完成までに10年を要した．井上が『分析論前書』を，加藤が『分析論後書』を翻訳し，1971年（昭和46年）に岩波書店から『アリストテレス全集1』として公刊された．

ところで，この時期（20代後半から30代後半）の井上の人柄をうかがわせる証言がいくつかある．まず，吉田夏彦[110]による証言をとりあげよう．吉田は井上より2歳年下で，北海道大学文学部哲学科を卒業したあと，1951年（昭和26年）4月に東京大学文学部大学院の院生になった．同じときに井上も院生になっているから，二人は大学院の同級生である．吉田は，院生時代の井上のエピソードを紹介している．

「井上さんと同期の黒田亘さんを始とする若い連中がわいわいと話し合い，話題がかなり砕けた方にも行った時，苦々しげに黙ってきいておいでだった井上さんが，『その辺でもういいでしょう．』と一喝なさり，皆が恐れ入ったということがあった．それで，井上さんは，真面目でこわい人だと感じていた[111]．」

実際，1953年（昭和28年）に27歳の井上は「叡智の道を歩むフィロソフィア〔哲学〕の徒には，真理は峻厳そのものであり，怠惰と無能とを一歩も許容しない」と書いている[112]．

岩田靖夫[113]も30歳前後の井上の姿を間近で見ていた．岩田は井上より6歳年下である．1953年（昭和28年）に東京大学文学部に進学し，1961年（昭和36年）に大学院を満期退学して東京大学教養学部の助手になった．井上と一緒に斎藤忍随[114]の演習（プラトン『ティマイオス』）に参加し[115]，また，井上の論文「アリストテレスの『有』把握」（1954年昭和29年公刊）に真っ黒になるほど書き込みをして勉強し[116]，井上の自宅にもよく来ていた[117]．

岩田が大学院生の頃，東大文学部哲学研究室の「先輩筋もしくは若先生筋に，四人の大酒豪」がいた

109）井上忠「加藤信朗氏『哲学の道』に懐う」『創文』第392号，1997年10月，p.11．なお，「駒場」というのは東京大学教養学部（東京都目黒区駒場）を指す．
110）吉田夏彦（1928年～，東京工業大学名誉教授，分析哲学）．
111）吉田夏彦「井上さんのこと」『追悼集』p.96.
112）井上忠「武蔵野雑感」『刻み4』p.180.
113）岩田靖夫（1932～2015年，東北大学・仙台白百合女子大学名誉教授，古代ギリシア哲学）．
114）斎藤忍随（1917～1986年，東京大学名誉教授，古代ギリシア哲学）．
115）岩田靖夫「夜行列車の響きのなかで」『追悼集』p.18.
116）筆者（伊佐敷）が井上から直接聞いた．
117）井上章子談．

と言う．斎藤忍随，大森荘蔵，井上忠，山本信[118]の4人である．

「この四人の酒に，われわれ大学院生たちは，渦の中に巻き込まれるように，飲み込まれて暮らしていた，と思います．斎藤先生は議論をあまり好まれませんでした．理論的な哲学を始めから信用していないようなところがあって，ひたすら，知識とアイロニーを愛していました．その反対に，大森先生は，どんなに酒を飲んでも哲学の問題について以外には話をしない方でした．どんな議論にもとことん付き合ってくれました．井上先生も大酒豪でしたが，酒を飲んでいてもいなくても，信念の人で，己を語って止まない，赤裸々に生きる方でした．こういう強烈な人たちの間にあって，山本先生は，酒量の点でも誰にも劣らないことは言うまでもありませんが，そのどのタイプにも通じながら，どれでもない，中庸の人だった，と思います[119]．」

当時の哲学研究室の雰囲気を彷彿とさせる文章である．20代後半から30代前半にかけての井上は，吉田夏彦や岩田靖夫に対して，「真面目でこわい人」「信念の人」「赤裸々に生きる人」という印象を与えていたようである．

しかし，井上より12歳年下の眞方忠道[120]は違う印象を受けている．井上と出会ったのは，真方が大学院に入った1962年（昭和37年）だった．このとき眞方は24歳，井上は36歳である．

「お祭りが通るようなニコニコ顔，カンラカンラの笑い声，ダジャレの連発，しかもそこに秘められている〔…〕心を揺さぶられるような言葉の魔術に僕は途方にくれてしまった[121]．」

眞方は井上の人柄に惹きつけられたのであろう．実際，吉田夏彦によると，井上の性格は途中から親しみやすく社交的なものに変化した．

「よく知られているように，やがて井上さんは，砕けた話にも率先してお入りになるようになられ，また，何かの理由で話について行けないでいる人に，実にやさしい笑顔で親切に説明する先輩におなりになった[122]．」

また，妻の章子によると，本と向き合っているときの井上は厳しい顔だったが，家族に対して恐い顔をすることはなく優しかった．子供たちも「お父ちゃま」となついていた．章子に対して威張ることもなかった．ただ，最初の出会いが「教師と学生」だったせいか，章子は井上の言うことになんでも従ったと言う．たとえば，新婚のころ「着物を着てほしい」と言われたので，それまで着なかった着物を着るようにした．自宅で着るだけでなく，非常勤講師として，お茶の水女子大学附属高校や田園調布雙葉高校で英語を教える際も着物を着て行った．着物で授業をする姿を見て，周囲の教員たちは驚いたが，かつて結婚前の章子に「哲学なんてやめなさい．貧乏するよ」と言った木原研三だけは「僕には分かる

118) 山本信（1924～2005年，東京大学名誉教授，ライプニッツ研究）．ちなみに山本の母親は，井上の妻の章子が在学・在籍した当時の女子学院の院長だった（井上章子談）．

119) 岩田靖夫「山本信先生を偲ぶ」佐藤徹郎ほか編『形而上学の可能性を求めて――山本信の哲学』工作舎，2012年，p.382.

120) 眞方忠道（1938年～，神戸大学名誉教授．ギリシア哲学）．

121) 眞方忠道「炎の人」『追悼集』p.70.

122) 吉田夏彦「井上さんのこと」『追悼集』p.96.

よ．洋服だと毎年流行が変わるからお金がかかるけど，着物ならそんな心配は要らないものね」と言った[123]．木原の頭の中では「哲学」と「貧乏」は切っても切れない関係にあるのだった．

ところで，井上が教師としての自分の教育観を述べている座談会の記録がある．『東京大学教養学部報』1965年（昭和40年）4月号に掲載された「駒場の学生たち[124]」という座談会である．『教養学部報』は年に9回発行され，教養学部の教職員と学生が読者として想定されている．この座談会は教養学部の教員7名によるものだった．39歳の井上は言う．

「二年になっていよいよ本郷に進学する前の学生の答案に，『あの激烈な入学試験を通り』という書き出しの答案が出てくる．それも一つでなく，よく出てくるわけです．すっかりあきれました[125]．」

入学して2年経っても，入試合格を自己評価の中心に置いていることにあきれたと言うのである．そして，自分の旧制一高時代と比較する．

「われわれの時代はというか，私はというか，とにかくここへ入るまでは，一生懸命駒場へ入りたいと思ったが，入ったときには，自分がどんなにむなしいものかいやというほどたたきつけられて，それからすべてははじまってきたわけです[126]．」「昔，中等教育を突破してこういうところに入ってくると，一年生と二年生とは月とスッポン，ゼロと百の差があったものです[127]．」

入学して自分の中身の無さに気づかされ，それから必死に精進した結果，入学時よりも成長したということである．だから，本の読み方にしても，「一冊本を読んだためにその人の人格が変わったというような読み方」，「ある一つのことにぶつかって，自分たちの限界を知ってしゅんとするというような，そういう読み方[128]」を井上は学生に求める．そして，重要なのは「人間としての根本の自覚の問題[129]」だと言う．

井上によれば，実は「学生は〔…〕ありとあらゆる疑問を持ち，しゃべりたくともしゃべれないというところを一ぱい持っているはず[130]」である．そのはずなのに，いつまでも「入試合格」を自己のアイデンティティにしている学生がいる．そこで，井上は自分の授業を通して何とかしようとする．

「依然としてそれ〔入試合格〕以外に自分の評価の基準がないわけです．これが終着駅になってしまって，新しいものが出てこない．だから一生懸命こっちは哲学を教える．いわゆる哲学の歴史は一切教えない．歴史事実を羅列して教えたんでは，教養に白くぬられた墓石ができるだけですよ[131]．」

123）この段落は井上章子談による．

124）「座談会　駒場の学生たち」『大学の散歩道』東京大学出版会，1966年，pp.263-283に再録．

125）「座談会　駒場の学生たち」『大学の散歩道』p.265．なお，東京大学に入学した学生は駒場キャンパス（東京都目黒区駒場）にある教養学部に2年間在籍したあと，本郷キャンパス（東京都文京区本郷）にある法学部・文学部・理学部・医学部などの学部へ進学する．

126）「座談会　駒場の学生たち」『大学の散歩道』p.265．なお，東京大学教養学部の前身が旧制一高である．

127）「座談会　駒場の学生たち」『大学の散歩道』p.278．井上の一高生時代については，伊佐敷隆弘「哲学者井上忠の生涯：誕生から最初の論文の完成まで」の第Ⅰ節「誕生から旧制一高生時代まで」第2項「一高入学」および第3項「自己の問題と絶望」を参照せよ．

128）「座談会　駒場の学生たち」『大学の散歩道』p.280.

129）「座談会　駒場の学生たち」『大学の散歩道』p.277.

130）「座談会　駒場の学生たち」『大学の散歩道』p.277.

131）「座談会　駒場の学生たち」『大学の散歩道』p.283.

「白くぬられた墓石」とは聖書[132]に由来する比喩で「外側はきれいだが，内側はけがれている者」すなわち偽善者のことを意味する．この比喩は，翌年の『東京大学教養学部報』1966年（昭和41年）5月号に井上が書いた「哲学を読もうとするひとに」という文章[133]にも現れ，そこでは，思想的内容の形骸的知識を貯め込んだ偽の愛智者[134]のことを意味している．

このころ井上は哲学担当の他の教員と一緒に『西洋哲学史』という教科書を書いた．この本は10年前の1955年（昭和30年）に第1版[135]が公刊されているが，そこでは，古代と中世を川田熊太郎[136]が，近世前半を山崎正一[137]が，近世後半と現代を原佑[138]が執筆した．1965年（昭和40年）に公刊された新版[139]では，古代と中世の部分を井上が全面的に書き直した．執筆の際「わたくし自身の講義ノート」として「講義の意図を一貫して強調する形に近づけ」ることを意図したと井上は言う[140]．したがって，この本に書かれているような内容の授業を当時実際におこなっていたと考えられる．井上は教科書の冒頭で学生に向かって次のように呼びかける．

「いかなる事実，いかなる知識をめぐってにせよ，またどんな地点からにせよ，ひとが，常識の馴れ馴れしいものわかり，学識の精緻な仮構に安んずることなく，それは『何か？』とどこまでも問い進むならば，この『何か？』との端的な問い，解答のない疑問を通じて，ひとは直ちに棲みなれた常識の薄明，使いなれた日常の概念の自明さから拉し去られ，もはや常識や学識と馴れあういかなる事実も根拠となりえない始原の荒野に出で立たされて，いわば道のない道を探り辿るほかにすべもない己を見出すであろう[141]．」

どんなことがらについてであれ「それは何か？」とどこまでも問い進むなら，道なき道をひとり探究する新たな自分を見いだすだろうと言うのである．井上が授業を通して学生に求めていたものがうかがわれる．

2　信州との関わり

本節第1項「若手研究者として」の冒頭で述べたように，30代前半の井上はプラトンとパルメニデスを集中的に研究した．パルメニデスについての最初の論文は1957年（昭和32年）12月に31歳で書き上げた「パルメニデスの歌」である．この論文には印象深い前書きが付いている．

132）「マタイによる福音書」第23章第27節～第28節．
133）井上忠「哲学を読もうとする人に」『刻み4』pp.100-104.
134）本論文第Ⅱ節「哲学とは何か」第1項「井上忠の哲学観」を参照せよ．
135）川田熊太郎・山崎正一・原佑著『西洋哲學史』東京大学出版会，1955年．
136）川田熊太郎（1899～1981年，東京大学教授・駒沢大学名誉教授，仏教学・比較思想）．
137）山崎正一（1912～1997年，東京大学名誉教授，西洋近代哲学）．
138）原佑（1916～1976年，東京大学教養学部教授，ドイツ哲学）．
139）山崎正一・原佑・井上忠著『西洋哲学史〔新版〕』東京大学出版会，1965年．井上が原稿を書き上げたのは1964年（昭和39年）11月である．（「井上忠教授・資料」『東大紀要』第83号，1986年，p.157による．）このとき井上は38歳だった．
140）井上忠「おくがき」山崎正一ほか著『西洋哲学史〔新版〕』p.247.
141）井上忠「第一篇　古代」山崎正一ほか著『西洋哲学史〔新版〕』p.5.

「信州峠を越えた日は雨であった．梢を掠めて白っぽい灰色の塊りが飛び駆けり，濃く淡く空の厚みを見せつつ，烈しい鉛色のしぶきを沛然とたたきつけては去った．〔…〕天使園を過ぎる頃，漸く空に明るさが増し，厚い灰色の覆いの一角が白く薄れて，紺碧の亀裂となり，山国の夏空特有の深い輝かしさを伝え始めた．その時であった．四囲を畳々たる雲の緞帳に枠どられた中に，突兀としてみずがき（瑞牆）山の巍峨たる姿が現れたのは[142]．」

信州峠は長野と山梨の県境にある．長野県側から峠を越えてしばらく行くと左に瑞牆山が見える．「天使園」というのは瑞牆山の麓に当時あった児童養護施設の名前である．

「私は息を呑んだ．雄渾な山容から立ち顕われたそれは，確かに眼前の自然の風光と，これに対する人間の現存とを，一瞬に色褪せしめ影と飛散せしめるなにかであったのだ．その瞬間，あたかも万有を徹透する存在の光源を遮蔽しつつ天地万象にその形影を保たしめている神秘の天門が，にわかに開かれて，万物悉く己の殻を破り越え，きらきらと一つの光の裡へと伸び上り，昇華するかと見えたのであった．しかしそれは瞬時にして去った．〔…〕自然は再び重厚であり，眼前には瑞牆の，悠然と雲を吐きつつ，陰影を極める壮大な展望があった．嘆賞すべき風光は存したが，もはやなんの異変もなかった[143]．」

この文章に現われる「それ」「なにか」は，「存在」「大いなるもの」「あれ」などとも呼ばれ，やがて「根拠」と呼ばれるようになる．井上が18歳のときの神秘体験[144]で出会ったものと同じものであろう．「瑞牆山体験」と名付けうるこの体験は，この論文「パルメニデスの歌」を書き上げる4ヵ月ほど前の1957年（昭和32年）の夏に起こった出来事だった[145]．その夏，井上と妻の章子は，長野県南佐久郡川上村の養蚕農家の一間をおよそ一ヵ月借りて住んでいた．最寄り駅の信濃川上駅[146]から歩いて20分くらいの場所である．当時，章子は東京大学大学院英文科の修士課程の院生だったので修士論文を書くために，そして，井上は哲学書を読んで考えるために，二人でここに来ていた．近所の養蚕農家で泉治典[147]も同じように間借りしており，井上たちと交代で自炊した．

ある日，井上と章子は山道を散歩に出かけた．井上の瑞牆山体験はそのときのことだった．章子は言う．

「瑞牆山を見たときは私と二人でした．私も怪奇な山容に何か恐ろしさを感じました．ぎざぎざで巨人がこぶしをふりあげたようでした．井上はそのとき『すごい』とは言いましたが，くわしくは言いませんでした．」

井上のこのときの体験を文章にしたのが，前述の「パルメニデスの歌」冒頭部分である．井上による

142）井上忠「パルメニデスの歌」『挑戦』p.39.

143）井上忠「パルメニデスの歌」『挑戦』pp.39-40.

144）18歳のときの神秘体験については，伊佐敷隆弘「哲学者井上忠の生涯：誕生から最初の論文の完成まで」の第Ⅰ節「誕生から旧制一高生時代まで」第4項「神秘体験」を参照せよ．

145）井上章子談．

146）信濃川上駅は現在（2018年），JR東日本の小海（こうみ）線の駅である．小海線は中央本線の小淵沢（こぶちざわ）駅が始発駅である．

147）泉治典（1928～2011年，東洋大学名誉教授，聖書学）．

と，そのとき口から出て来たのは「ヘラクレイトス」の名だった[148]．

ところで，信濃川上駅から西へ30キロメートルほどのところに信濃境駅がある．中央本線で山梨県から長野県に入った場合の最初の駅である[149]．長野県諏訪郡富士見町に位置する．富士見町も井上とゆかりのある土地である．信濃境駅から北東方向へしばらく歩くと八ヶ岳の麓に高森草庵という修道院があるが，これは，井上と同じく1951年（昭和26年）に東京大学文学部哲学科を卒業した押田成人[150]が開いた修道院である．押田は東京帝国大学理学部物理学科から文学部哲学科に移ったという経歴を持ち，同じように物理学科から哲学科に移った大森荘蔵と物理学科で同期だった[151]．押田は哲学科を卒業した後，すぐにドミニコ修道会に入る[152]．そして，1964年（昭和39年）に八ヶ岳の麓の富士見町境高森という場所に修道院を開き，2003年（平成15年）に81歳で亡くなるまで約40年間そこに住み続けた．修道院と言っても，まったく和風の民家である．周囲に田畑を作り，ほとんど自給自足の生活をした．坐禅を取り入れていることも特徴である．日本国内や海外からいろいろな人々が訪れ滞在していく．若い人が多く，また，仏教の僧侶が訪れることもあった[153]．井上夫妻そして，東京大学の学生だった山本巍[154]や宮本久雄[155]も高森草庵をしばしば訪れた[156]．たとえば，1967年（昭和42年）に押田の指導で読書会（トマス・アクィナス『存在と本質について』[157]）が開かれ，山本や宮本など5～6人の学生たちが参加した[158]．また，1965年（昭和40年）前後に井上は東京大学教養学部のカトリック研究会という学生サークルの指導教員をしていたが，駒場祭（大学祭）でカトリック研究会主催の講演会が開かれ，井上忠，加藤信朗，押田成人の三人が講師を務めたこともあった[159]．

井上は1967年（昭和42年）に富士見町に山荘を建てた．41歳だった．間取りは四畳半2部屋と台所で，工事を学生たちが手伝ってくれた[160]．山荘は信濃境駅から高森草庵とは反対方向に歩いて30分ほどの場所にあり，東に八ヶ岳が，西に駒ヶ岳が見える．東京都練馬区立野町の自宅から山荘まで章子の運転する車で移動した．井上は眼が悪い[161]ために運転できなかった．井上が一人で山荘へ行くこともあったが，そのときは中央本線の吉祥寺駅から始発に乗り，信濃境駅で降りて，山荘まで歩いて行っ

148) 井上忠「パルメニデスの歌」『挑戦』p.40．ヘラクレイトス（Herakleitos, 前540頃～前480頃, ギリシアの哲学者）．
149) 山梨県側の最後の駅が小淵沢駅で，ここから小海線が出ており，前述の信濃川上駅へ通じている．
150) 押田成人（1922～2003年，ドミニコ会司祭）．経歴は押田成人『遠いまなざし』地湧社，1983年などによる．
151) 山本巍（東京大学名誉教授）談．
152) 押田が修道院に入る上で決定的な影響を与えたのは，ホイヴェルス神父である（押田成人『遠いまなざし』pp.81-82）．ホイヴェルス神父は井上忠や加藤信朗にも大きな影響を与えている．本論文の第Ⅰ節「研究者としてのスタート」第2項「加藤信朗の哲学への復帰」を参照せよ．
153) 筆者（伊佐敷）が高校の先輩に連れられて1975年（昭和50年）に訪問したとき，禅僧が滞在していた．
154) 山本巍（1945年～，東京大学名誉教授，古代ギリシア哲学）．
155) 宮本久雄（1945年～，東京大学名誉教授，キリスト教神学）．
156) 藤本隆志（1934～2017年，東京大学名誉教授，英米哲学）談．山本巍談．井上章子談．
157) Thomas Aquinas（1225～1274年，中世のスコラ哲学者）『存在と本質について（De Ente et Essentia）』．
158) 山本巍談．
159) 山本巍談．また，カトリック研究会における井上の指導の様子を，当時学生だった中村弓子（1944年～，お茶の水女子大学名誉教授，フランス思想）が中村弓子「井上忠先生の『急転直下』」『追悼集』pp.59-60に書いている．
160) 山本巍談．井上章子談．
161) 本論文の次項「『根拠』『全体』『作品』」を参照せよ．

た．そして，山荘で2，3日過して東京に戻って来た[162]．

富士見町には藤澤令夫[163]の山荘もある．藤澤は井上より1年あとの1968年（昭和43年）に山荘を購入した[164]．藤澤は言う．

「大学紛争の年と学部長の任期中以外は毎年確実に，七月から九月にかけて五〇日あまりをここで過ごしてきた．〔…〕秋まで，多少の不義理をおかしても，できるだけ長くここでねばる．この自然の静寂のなかで，現代の状況に抗して閑暇と持続と集中を奪回し，脳細胞を洗濯し充電しないと，どうにもならないからである[165]．」

藤澤の山荘は，井上の山荘から歩いていける距離にある．井上夫妻も1969年（昭和44年）頃に藤澤の山荘に招かれて昼食を共にしたことがあるが，藤澤がこの土地を選んだのは，井上とは無関係のようである[166]．藤澤の出身地である長野県松本市[167]に近いことが理由の一つかもしれない．

3　「根拠」「全体」「作品」

井上の研究生活は順調に進んできたが，36歳のとき，病魔が井上を襲う．右眼の網膜剥離のためにおよそ10ヵ月の入院生活を余儀なくされた．1962年（昭和37年）6月に入院し，4回の手術を経て，翌1963年（昭和38年）3月31日に退院した[168]．4回目の手術の直前にこう書いている．

「同じ右眼に手術三回，それぞれ術後二三週間絶対安静で，ベッドに磔けられ，ひどく痛い止血剤の注射が一ヶ月，あるいは，眼球そのものへの注射が一ヶ月と，いい加減痛めつけられた．〔…〕なにしろ，手術される眼が，一部始終を一番近々と観ているのだから．メスが来る．押さえている脱脂綿の棒をつたって，血が〔…〕勢いよく噴き上がる．針が近づく．縫糸が黒い．みんな見える．それが延々二時間続く[169]．」

入院中，本を読んだり文章を書いたりすることは一切禁じられた．そこで妻の章子の発案で最新式のテープレコーダーを購入し[170]，好きな「こまどり姉妹」の歌をラジオから録音し[171]，再生して気を紛らせた．

井上は入院していたこの10ヵ月を「漆黒の劫風吹きすさぶ錬獄[172]」と呼ぶ．しかし，この時期を経て，研究はさらに一段階進んだ．「根拠」「全体」「作品」という3つの新しい鍵概念を手に入れたからである．

162）井上章子談．

163）藤澤令夫については，本論文の第Ⅰ節「研究者としてのスタート」第4項「初めての全国学会研究発表」および第Ⅱ節「哲学とは何か」第3項「藤澤令夫の哲学観」を参照せよ．

164）「年譜」『藤澤令夫著作集　第Ⅶ巻』p.*12*．当時，藤澤は京都大学文学部の助教授だった．

165）藤澤令夫「生活と想念―京都・一九八二年―」『藤澤令夫著作集　第Ⅶ巻』pp.281-281.

166）井上章子談．

167）「年譜」『藤澤令夫著作集　第Ⅶ巻』p.*11*.

168）井上章子談．

169）井上忠「虎の門から」『刻み4』pp.192-193.

170）井上章子談．

171）井上忠「虎の門から」『刻み4』p.197.

172）井上忠「おわりに」『挑戦』p.329．なお，「錬獄」というのは井上独得の表記であり，通常は「煉獄」と書かれる．

これらの概念が初めて登場するのは，退院のおよそ 8 ヵ月後に書き上げた論文「出で遭いへの訓練[173]」においてである．「出で遭い」は「いであい」と読む．この論文について井上は言う．

「漆黒の劫風吹きすさぶ錬獄〔…〕から，『根拠』『全体』『作品』の三つの言葉をひっさげて，異なりの世にわたしは甦（よみがえ）った．論文の体（てい）をなしているとは言えないが，この一篇は，黄泉路（よみじ）よりこの世を凝（み）視る眼を教えられ，『哲学』の途をたしかに踏みしめているとの思いをもって，わたしが踏み出した一歩である[174]．」

確かに，この論文は型破りである．同僚・先輩・友人を実名で登場させ，彼らの口頭での発言を記したあげく[175]，論文末尾を，「濫（みだ）りに実名を挙げ，辱知（じょくち）の諸先輩の言動を捏造（ねつぞう）に及んだ点，文責はすべて筆者にあるは勿論ながら，深くお詫び申し上げます」と結んでいる．しかし，論文を読んだ印象からすると，捏造とは思えない．ここに書かれてあるような内容の議論が井上と彼らの間に実際あったのではないか．たとえば，大森荘蔵（おおもりしょうぞう）から次のように言われたと井上は書いている．

「事実は根拠にならないそうですが，例えば自然科学は事実を根拠としております．自然科学は根拠の学ではありません．では，根拠とは何ですか．例を挙げてください，例を挙げられるとすれば，それは事実と同じです．根拠は事実ではありません．では根拠とは何か，示して下さい．語ってもらえば，それを聞いて偏見なしに分りたいと思います．（沈黙）[176]．」

また，原佑（はらたすく）からは次のように言われた．

「『作品』という言葉は，適当でない，〔…〕むしろ『表現』と称すべき[177]」

この論文「出で遭いへの訓練」は，井上が「根拠」「全体」「作品」という鍵概念を獲得していく過程を描いたものであるように思われる．「出で遭いへの訓練」を皮切りに退院後の 5 年間に井上が書いた論文は次のとおりである．精力的に研究を再開している．（かっこ内に執筆時の年齢を付記する．）

「出で遭いへの訓練[178]」（37 歳）

『西洋哲学史〔新版〕』「第一篇 古代[179]」（38 歳）

『西洋哲学史〔新版〕』「第二篇 中世[180]」（38 歳）

---

173) 『東大紀要』第 31 号，1964 年．（『挑戦』pp.131-166 に再録．）

174) 井上忠「おわりに」『挑戦』p.329.

175) 口頭の発言が記載されているのは，原佑，斎藤忍随，大森荘蔵，築島裕（つきしま・ひろし，1925 ～ 2011 年，東京大学文学部名誉教授，国語学）の 4 人である．その他，藤澤令夫，今道友信，松本正夫（まつもと・まさお，1910 ～ 1998 年，慶応義塾大学名誉教授，中世スコラ哲学），上原淳道（うえはら・ただみち，1921 ～ 1999 年，東京大学教養学部教授，中国史）の名前が言及されている．なお，築島裕は旧制一高での同窓生である．井上は加藤信朗の家を出てから立野町に住み始めるまでの間，築島の家に住んでいた．また，築島は井上の最初の活字論文「アリストテレスの『有』把握」を墨で清書し，背表紙にタイトルをきれいな字で書いてくれた．網膜剥離で長期入院したときも毎日のように来て井上の世話をした（井上章子談）．

176) 井上忠「出で遭いへの訓練」『挑戦』p.157.

177) 井上忠「出で遭いへの訓練」『挑戦』p.155.

178) 『東大紀要』第 31 号，1964 年．（『挑戦』pp.131-166 に再録．）『東大紀要』掲載時には「プラトンへの挑戦（四）」というサブタイトルが付いていた．

179) 山崎正一・原佑・井上忠著『西洋哲学史〔新版〕』東京大学出版会，1965 年，pp.3-46.

180) 山崎正一・原佑・井上忠著『西洋哲学史〔新版〕』東京大学出版会，1965 年，pp.47-88.

「『性と死を超えるもの』序曲――応戦の気構え[181]」（38 歳）

「イデア[182]」（39 歳）

「ギリシア哲学は何であったか？[183]」（公刊時 39 歳）

「イデアイ――プラトンの場合[184]」（39 歳）

「死者は甦る――性と死をこえるもの[185]」（39 歳）

「途の埋草　二つ三つ[186]」（40 歳）

「神よりもなお大いなるもの――途のしるべ[187]」（41 歳）

のちに井上は，20 代後半から 30 代後半までの自分の研究を振り返り，「パルメニデス・プラトン・アリストテレスと対決しつつ,〔…〕ついにひとつの峠を登りつめた『イデアイ』[188]」と書いている．つまり，1965 年（昭和 40 年）12 月に 39 歳で書き上げた論文「イデアイ――プラトンの場合」は，この時期の井上にとって一つの到達点だった．

井上は「イデアイ」の冒頭に 3 つのキーワード「根拠」「全体」「作品」を登場させ，哲学とは何であるかを定義する．

「哲学は，全体としての，根拠を，ここに，作品として，刻みとる，途である[189]．」

この文は井上哲学をひとことで要約したものだと言える[190]．そして，井上は言う．

「事実は根拠ではない．〔…〕事実はいつも偶然なものであり，なにか断片にすぎぬものである．〔…〕事実はなにかの部分であり，根拠はその全体である．〔…〕しかし，〔…〕根拠たる全体は，背後に沈み隠れている．〔…〕事実の地平に顕現している全体と見えるものは，〔…〕全体ではなく，全体もどきたる一般者にほかならない[191]．」

一般者とは一般概念のことである．「馬」「人」のような一般名詞や「美」「善」のような抽象名詞は一般概念を表している．哲学用語もすべて一般概念である．しかし，一般概念によっては表し得ないものがある．すなわち，「わたし」の唯一性である．

「われの唯一性こそは，あらゆる一般者の限定を超え出でる．〔…〕全事実界を動員しても，充填（じゅうてん）も抹殺もできぬこの自我の唯一性は，絶望のさ中に，事実を超えるものを，自己を根拠づけ，この絶望を充

181）『東大紀要』第 33 号，1965 年．（『刻み 1』pp.27-68 に再録．）

182）哲学会編『哲学雑誌』第 80 巻第 752 号，1965 年．（『挑戦』pp.167-203 に再録．）

183）石母田正ほか編『古代史講座　第 12　古代思想と芸術』学生社，1965 年，pp.22-49．（脱稿日は不明．）

184）日本哲学会編『哲学』第 16 巻．（『挑戦』pp.204-222 に再録．）

185）『東大紀要 37』1966 年．（『刻み 1』pp.69-148 に再録．）

186）『東大紀要 41』1967 年．（『刻み 1』pp.149-194 に再録．）

187）『東大紀要 45』1968 年．（『刻み 1』pp.195-212 に再録．）

188）井上忠「あとがき」『刻み 1』p.289．なお，「イデアイ」とは，プラトンの言う「イデア」のこと（「イデア」の複数形）である．

189）井上忠「イデアイ」『挑戦』p.204.

190）「根拠」「全体」「作品」というキーワードは最晩年まで消えることはなかった．井上の最後の単著『究極の探究』（公刊時 72 歳）でもあちこちに登場している．とは言え，研究の進展にともない，新たなキーワードが付け加わっている．この点については別稿で論じる．

191）井上忠「イデアイ」『挑戦』pp.204-205.

足させるものを，否定しがたく翹望している[192]．」

自我の唯一性は一般概念によって表し得るような「事実」ではない．己の唯一性を根拠づけるものを求めて自我は絶望の中をさまよう．

「突如として，事実の仮底は破れ，自我の唯一性を，その指標となしつづけた根拠は，その全体を電撃と化して，絶望を打ち砕き，われを圧倒し，急襲するのである[193]．」

これは井上自身の19歳のときの体験である．すなわち，旧制一高の南寮の屋上での神秘体験である[194]．また，井上に言わせれば，古代ギリシアにおいて哲学が始まったときの哲学者たちの体験でもある[195]．しかし，この神秘体験において出会われる根拠は，事実の世界から遊離した何かではない．

「根拠は完全な全体であるゆえに，なにものも欠くことはない．したがって，異なりの地平も，この地平での事実も作品も，すべてはその部分であり，部分を欠いては，全体はなく，根拠はない[196]．」「根拠は，われわれと近みにおいて出で遭うもの以外ではない[197]．」

そのとき，哲学の役割は，事実の地平において，根拠を映す作品を作ることである．

「われは，われ自身を，その出で遭う近きものともどもに，この場に，みずからの前に置き据えて，根拠をうつす作品と刻むのである[198]．」

これは，文学作品というような意味での作品を制作することではない．自分自身の作品化である．「作品化とは，自己を自己の前に置き刻むこと[199]」すなわち，「みずからを作品として彫琢し，作品たるおのれの小さなたたずまいのなかに，われわれの眼には蔽われてあるもの〔根拠〕の姿を，かすかに，読み入ろうとする[200]」ことである．

さらに，「作品化の途にあるかぎり，一木一草，一輪の紅花，一枝の紅葉，すべては，全存在を実のらせ，根拠との出で遭いの形である[201]．」自分自身だけでなく，自分が出会うすべてを根拠の作品とすることができる．

しかし，自己の作品化と言っても，言葉を棄てて実践的にのみ生きるということではない．確かに「作品の刻み，自己の作品化が哲学の途の中核」にあるのだが，「哲学の途は，理性の灯影以外にたよることなき言葉の刻み[202]」だからである．

---

192) 井上忠「イデアイ」『挑戦』p.207.
193) 井上忠「イデアイ」『挑戦』p.209.
194) 井上忠「二冊の「本」」『刻み 4』pp.21-24 と「イデアイ」『挑戦』p.209 を対照せよ．また，伊佐敷隆弘「哲学者井上忠の生涯：誕生から最初の論文の完成まで」の第 I 節「誕生から旧制一高生時代まで」第 4 項「神秘体験」を参照せよ．
195) 井上忠「プラトンへの挑戦」『挑戦』pp.16-18, 22. 井上忠「パルメニデスの歌」『挑戦』pp.60-63. 井上忠「イデア」『挑戦』p.183.
196) 井上忠「イデアイ」『挑戦』p.214.
197) 井上忠「イデアイ」『挑戦』p.216.
198) 井上忠「イデアイ」『挑戦』p.211.
199) 井上忠「途の埋草　二つ三つ」『刻み 1』p.153.
200) 井上忠「出で遭いへの訓練」『挑戦』p.142.
201) 井上忠「死者は甦る」『刻み 1』p.148.
202) 井上忠「途の埋草　二つ三つ」『刻み 1』p.153.

論文「イデアイ」の要点は，井上自身によって，「神よりもなお大いなるもの」という論文[203]の中で次の12個の命題にまとめられている[204]．各命題の後のかっこの中は引用者(伊佐敷)による解釈である．

1.「われわれは背面の地平に棲む.」〔根拠は隠れている.〕
2.「求められているものは，全体である.」〔全体（根拠）と全体もどき（一般者）は異なる.〕
3.「全体とは，求めているわれわれ自身を含むものでなければならない.」〔我々自身を含まないのは，全体ではなく，全体もどきにすぎない.〕
4.「自己自身の徴表は，抜き差しならぬ唯一性である.」〔自己とは代替不可能な唯一性である.〕
5.「自己の唯一性は，それ自身，いかなる明晰な内容をも持たず，他との判明な異なりにおいて現れる.」〔自己対象化は，見る自己の無限後退に陥る．自己の唯一性を描くことはできない．自己は絶望に至る.〕
6.「自己の無内容な孤立化を成立させるのは，根拠そのものの迫りなのである.」〔自己の根拠は事実にないがゆえに，自己は孤立する.〕
7.「根拠は全体である.」〔根拠は，事実を部分とする全体である.〕
8.「いかなる自己脱却（エクスタシス）の試みも，全体の把握を可能にするものではなく，自己の唯一性，他との異なりを消去し得ない.」〔すばらしい芸術も根拠もどきであって根拠ではない.〕
9.「自己認識は，自己の根拠を，自己を含む全体を，自己の前に置き据えられた自分として，択び，刻み，担(にな)いとるほかはない.」〔みずからを，根拠の作品として刻み上げよ.〕
10.「理性による出で遭いの途が，人間の本質である.」〔理性以外の何物も権威としてはならない．作品化とは根拠との出で遭いの途である.〕
11.「子は父よりも大いなるものである.」〔作品化によって根拠の子となり，根拠を逆に担いとれ.〕
12.「子は，孤たるを恥じねばならぬ.」〔作品化の途にある限り，すべてのものは根拠との出で遭いの形である.〕

のちに井上は言う．

「生身(なまみ)のわたしが全体と出遭(いであ)えるか．〔…〕いかに小さくあろうとも，この自分自身が全体を担い通してゆく以外に，出遭いの途はない〔…〕．全体を担う，それは全体をこころに想い描くことではない．現実の小さな一部分を，〔すなわち〕全体からわたしに頒(わか)ち送られた部分，〔すなわち〕自分を，運命として担い通してゆくこと，そして自分の運命を，全体すなわち〔…〕根拠の作品として，根拠に対して一髪(いっぱつ)の翳(かげ)りもなく身を披きぬきつつ刻みゆくこと以外ではない．この身は，自分と世界のすべてを支え担っている根拠を，認識のために担い返す生体実験場であり，満身創痍となり果てつつ，ひたすらに根拠か

203) この「神よりもなお大いなるもの」という論文はアメリカ留学前に書かれた最後の論文である．井上は論文末尾に脱稿日を記す習慣があったが，この論文の末尾には「一九六七・七・二七ホノルル．七・二八ロスアンゼルスにて一部改稿」と記している．渡米の最中に書き上げたことが分かる．

204) 1から12の番号は元の論文にはない．引用者（伊佐敷）が付けた．

らの呼びかけに応じて，根拠への途を，哲学の途を拓く現場である[205]．」

本論文第Ⅱ節「哲学とは何か」第1項「井上忠の哲学観」で述べたように，井上にとっての哲学とは，「ひとりひとりの徹底的に主体的な現実」としてのみ実行可能なものであり，それゆえ，哲学が「把握する存在の内実の豊かさは，到底言葉の貧弱さに盛ることはできぬ」すなわち「窮極の真実は語りえぬ」のだった．また，哲学史研究も主体的に哲学を営む者どうしの「対話形式の一つとしてのみ成立する」のであった．井上はそのような仕方で古代ギリシアの哲学者と対話することによって自分の哲学を鍛え，自分に見えた「実在の風光」すなわち語りえぬ「窮極の真実」を「根拠」「全体」「作品」という鍵概念によってなんとか示そうとするのである．

論文「イデアイ」は井上にとって学生時代以来のおよそ20年の歩みの到達点だった．

「『イデアイ』を書いたとき，わたしは幼い日から追い求めつづけた一つの小径（こみち）をついに歩み終えた．と思った．少なくともわたしの前には踏み出すべき大地が無かった．霧はますます深く，視界は相変わらずまったく効かなかったが，逆巻（さかま）く暗風（あんぷう）は途絶え，不思議な晴朗がこころにあった[206]．」

そのとき井上の心にはこんな想いが浮かんできた．

「なにもない世界の涯に行って落葉が散るのを見たい．わたしはそれだけを想った．世界の涯としてそのときこころに浮かんだのは，なぜかアメリカ，それもその東部の波打ち際だった．〔…〕やがてわたしは夢想した涯まで実際に旅した[207]．」

論文「イデアイ」を書き上げた1年半後の1967年（昭和42年）8月に41歳の井上はアメリカ合衆国に留学する．そして，この留学は井上の研究スタイルに大きな変化をもたらすことになる．

謝　辞

本論文執筆の際，加藤信朗（かとうしんろう）氏（東京都立大学名誉教授），藤本隆志（ふじもとたかし）氏（東京大学名誉教授），山本巍（やまもとたかし）氏（東京大学名誉教授），井上章子（いのうえふみこ）氏（共立女子大学名誉教授，井上忠夫人）から貴重な情報をご提供いただいた．記して感謝申し上げたい．また，本論文において言及するすべての方々の氏名から敬称を略させていただいた．ご了解いただければ幸いである．

文献略称表

本論文では以下の略称を用いる．（また，本論文では引用の際に原文にない読み仮名を付け加える場合がある．）
『挑戦』：井上忠『根拠よりの挑戦――ギリシア哲学究攻』東京大学出版会，1974年．
『現場』：井上忠『哲学の現場――アリストテレスよ　語れ』勁草書房，1980年．

205）井上忠「はしがき」『刻み1』pp. ii - iii．『刻み』シリーズ全4巻は井上が60歳で定年退官する際に公刊された．『挑戦』と『現場』に再録されなかった論文や随筆が収録されている．そのうち『刻み1』には「イデアイ」と同時期に書かれた論考が集められている．

206）井上忠「あとがき」『現場』p.355.

207）井上忠「あとがき」『現場』p.355.

『刻み 1』：井上忠『哲学の刻み 1　性と死を超えるもの』法藏館，1985 年.
『刻み 2』：井上忠『哲学の刻み 2　言葉に射し透されて』法藏館，1985 年.
『刻み 3』：井上忠『哲学の刻み 3　知の階梯を昇りつつ』法藏館，1986 年.
『刻み 4』：井上忠『哲学の刻み 4　運命との舞踏』法藏館，1986 年.
『モイラ』：井上忠『モイラ言語――アリストテレスを超えて』東京大学出版会，1988 年.
『超言語』：井上忠『超 = 言語の探求――ことばの自閉空間を打ち破る』法藏館，1992 年.
『パルメニデス』：井上忠『パルメニデス』青土社，1996 年（新装版 2004 年）.
『究極』：井上忠『究極の探究――神と死の言語機構分析』法藏館，1998 年.
『追悼集』：『井上忠先生追悼集』井上忠先生追悼集刊行委員会，2014 年.
『東大紀要』：東京大学教養学部『人文科学科紀要』.
なお，次の文献は 1986 年 3 月までの井上の著作の網羅的なリストである.
「井上忠教授・資料」東京大学教養学部『人文科学科紀要 83　哲学 23』1986 年，pp.141-158.